

保育学の本領

倉橋 惣三

保育学の領域は廣い。横には幼児生活の全面に亘り、縦には基本研究から實際研究に及ぶ。研究者としては、それらの専門面を局限し、それだけでなく精深に達し得ないであろうが、狭く偏しては完き保育学にならない。但、領域が廣いといふのも、研究せらるべき内容の範囲が廣く、事項が多いといふ点ではない。それらのすべてが交錯連関して、内に含有の廣さをもつといふ意味である。これは、その對照たる幼児の生活が常に渾然として各面を切離すことの出張ない全一性のものであるからである。幼児生活の此の本質が即ち保育学の本質となる。

幼稚書の目的として、幼児を保育して心身の発達を助長するといわれているのが、心身を二つにならべているのではないことはいふまでもない。絶対に二つにわけてない心身である。心身の相関は、人間のいつの場合にもいはれることであるが、幼児保育の場合には、量にどうした原理に止まることなく、現実の生活実相として常に一つなのである。これを発達未分化といへばそれまでのことでもあるが、ここにこそ、幼児生活の、從つて幼児保育の特質もあり、眞諦もあり、妙味もあるのである。保育学の木根も亦、これを離れて存在しない、入るには何れからするもよい。究極は必ず此の本領が抱えられなくてはならない。各の研究分野は、それ等自身として素より独立の学的存在と必要とさむつ、しかし、それ等の詳細と集積だけが直に保育学ではない苦である。過去の保育学の意味があるものであるまいか、但、こゝろした考へ方は、既に学を常識に止

める危険がないではない。われらの言ふところは、研究態度に何處までも嚴密な科学性を具えつ、その對象の特質から生ずる必然の非分離性を求めているのである。

カセール博士の就学前児童学へ即ち保育学の基礎が、新界の頭着な学的業績であることは更めて云ふまでもないが、氏が井ノ川シン大学とクラーク大学における心理学と、エール大学における医学の学位所持者であることは見のがされぬ。又、かのメンテツソリー女史の独創の保育学も、女史がローマ大学における医学と教育学の両学位所持者であつたことを、こゝろなづかせられぬにいな。之れ等の場合は、或は特例でもあらうが、保育学構成の道筋の一例として、又その成果たる保育学の本領の一定証としても、考へさせられるところがありはすまいか、どうして、必ずしも一人でこの本領に達しないでも、合同協力の研究によつて、日本保育学会に、その実現を期待したいものである。

予告

日本保育学会第二回大会開催

第二回大会は次のように開催されることになった。詳しくはプロクラムは、いづれ各會諸氏の手元にとかく苦であるが、予め御泉知置き願ひ、會つて参加されたい(研究発表の勧誘状は正會員に對しては、既に送られてゐる。) 日時 五月二十九日(日曜)午前九時より 會場 東京女子高等師範学校附属幼稚園

MINOR STUDY 保育実践と理論的基礎

行田 俊雄

児童福祉法による保育試験にたがきはって課題に關するいくつかの
データを得た。ここに述べる分、某地方の「保育理論」及「保育実
習」の問題は、前半はテスト形式、後半は在来の形であり、その一
例をあげると

〔理論〕

- (一) 私達はとももといつも人のいふ通りに行動することのできる人にな
つくりあはるような育て方をしなければならぬ(当否法)
- (二) 遊具、童話、音楽等一般に児童文化財の選択にあたっては、どの
ような点に考慮しなければならぬか。

〔実習〕

- (三) 仲間、ぶらんこに順番に乗ることは、普通 からしつけられ
る。

- (乙) 三才児 四才児 五才児 六才児 (選択法)

- (四) 保育所に新に入所する小児の多い時期のある一日について、どの
ような保育計画を立てたらよいか。

このような問題で、受験者三十一名(殆ど全部現に保育に従事中)の
得た平均点は、理論六三七点、実習六五〇点であった。各一〇〇
点満点) 前掲の問題例についていえば

- (一) 四五点 (各一〇点満点)
- (二) 三三點 (各一〇点満点)
- (三) 一五〇点 (各三〇点満点)
- (四) 一七九点 (各三〇点満点)

(一) 及び(三)の類は、テスト的な問題で、大体一義的な答が与えられる
のであるが、保育の実践にあつては、注目しなければならぬ、理論的教養の水準
がこの程度であることは、注目をしなければならぬ。

との関係である。

保 育 理 論

得点	年齢	19*	21-24	25-29	30-39	40-49	50-59
89	80	100.0%	11.0				
79	70		53.3	60.0	33.3		
74	60		33.3				
72	50		11.1	40.0	33.3		
71	40		11.1		33.3	100.0	100.0
	計	100.0%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

保 育 実 習

得点	年齢	19*	21-24	25-29	30-39	40-49	50-59
89	80		44.4		33.3		
79	70	100.0%	22.2				
69	60			80.0	33.3	150.0	
59	50		22.2	20.0			
49	40		11.1		33.3	50.0	100.0
	計	100.0%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

この表を見ると、理論的基礎において、大きな弱点を露呈
している。殊に新しい保育について理解に乏しいように見
受けらる。

ここに用いた資料は、部分的であり、教員はなほ少いので
あるが、示唆するものがあると思われるので、敢えて問題と
して提起する次第である。

